

被爆80周年記念事業

「平和のためのダイアログ・イン・ザ・ダーク広島2025」 開催報告書

黙るのではなく、
話すこと。
戦争の反対語は、
対話だから。



PEACE
IN THE
DARK

Dialogue
Japan
Society

Dialogue Japan Society
一般社団法人

2025.10

実現に向けてご尽力いただきましたすべての皆さんへ

このたび、被爆80周年記念事業として開催いたしました「平和のためのダイアログ・イン・ザ・ダーク広島2025」に多大なるご支援とご協力を賜りました広島市、広島県、中国新聞社、ならびに協賛・協力企業の皆さんに、心より厚く御礼申し上げます。

視覚障害者の案内のものと、2025年に生きる私たちが初めて出会う方々と8名のチームを組み、暗闇の中に設えた1945年の広島を訪れ、その場を考察することで今後90年、100年と平和が続くために大切なことを語り合い、行動していくこのプログラムは、日常では得がたい気づきをもたらし、暗闇から2025年に戻り国籍や世代、経験を超えた多様な方々が互いの思いや意見に耳を傾け合い対話の場を創出するものです。

戦後80年という節目にあたり、平和の本質を体感的に問いかねる場として広島の地で実現できましたことは、深い意義を感じております。被爆をなさった方、そして被爆二世という宿命を背負った方々がご体験後には「宿命を使命に変えて温かな気持ちの中で平和を伝えていきたい」とお話くださった方のお言葉も忘れたくありません。暗闇に身をゆだねる時間は、言葉や立場、障がいの有無といった境界を超えて、互いの存在をありのままに受けとめる契機となります。そこでは恐れや偏見を手放し、耳を澄ませ、心で聴く対話が生まれます。平和は遠い理想ではなく、こうした一人ひとりの小さな理解と尊重の積み重ねから築かれるのだと、参加された多くの方々が実感してくださいました。

本プロジェクトは、広島だけで完結するものではありません。世代や国境を越えて「共に生きる未来」を描く契機として、世界各地に広がる可能性を秘めています。暗闇という普遍的な体験を通して、多様性を受け入れ、違いを力に変えていく——その輪が、今回の広島から確かに広がり始めました。

改めて、開催に向けて多方面からご尽力いただいた皆さんに深い感謝を申し上げます。これからも平和を紡ぐ対話の旅を、丁寧に進めてまいります。

2025年夏
一般社団法人 ダイアローグ・ジャパン・ソサエティ
代表理事 志村季世恵

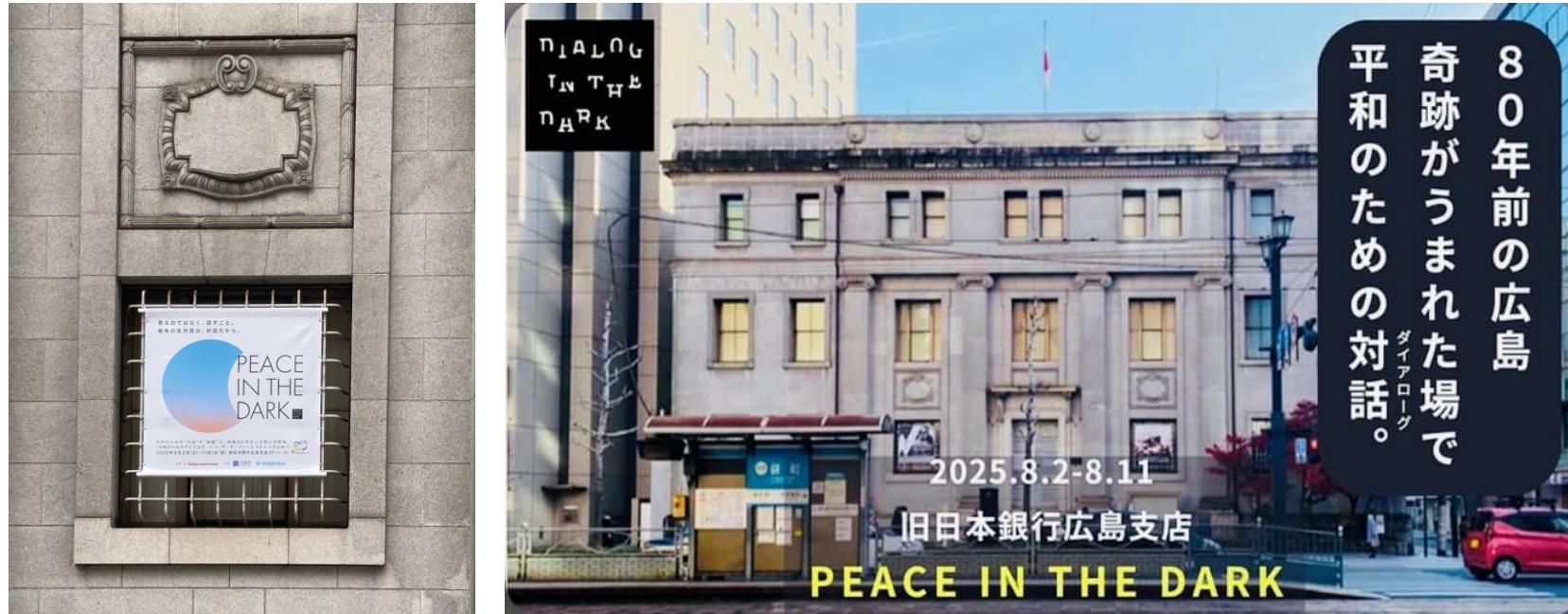
実現に向けてご尽力いただきましたすべての皆さんへ	P2
01. 歴史的文脈 — 戦後80年と旧日本銀行広島支店	P4
02. 「日銀の奇跡」と吉川智慧丸支店長の物語	P5
03. 「ダイアログ・イン・ザ・ダーク」の特性	P6
04. プロジェクトの意義	P7
05. 実施概要・実績/参加者属性	P8
06. 参加者	P9
07. 参加者の感想より	P10～13
08. 参加者の「平和のために自分ができること」	P14～23
09. オープニングレセプション	P24
10. 在日大使・大使夫人コーラス	P25
11. 中本覚二軍医について	P26
12. 「平原綾香 Jupiter基金」のご支援による子ども体験	P27
13. ボランティアについて	P28
14. 収支報告	P29
15. プロジェクト総括と可能性	P30～31
16. ご協賛・ご協力いただいたみなさま	P32
17. クラウドファンディング	P33～36
18. メディア露出	P37～47
終わりのはじまりのはじまり	P48

01. 歴史的文脈 — 戦後80年と旧日本銀行広島支店

DIALOG
IN THE DARK
JAPAN

戦後80年という文脈では、旧日本銀行広島支店は原爆投下直後の混乱の中で、人々の誠実さと互いを信じる心が生んだ「日銀の奇跡」の舞台として重要です。

建物自体も被爆の痕跡を残しつつ、現在は市民の芸術・文化活動の場や被爆の実相を伝える施設として活用されており、平和を語り継ぐ歴史的遺産となっています。



02. 「日銀の奇跡」と吉川智慧丸支店長の物語

WHERE



竣工当時の日本銀行広島支店 1936(昭和11)年
The new Bank of Japan Hiroshima Branch upon completion in 1936

1945年8月5日までに強靭化

WHO



第十四代
吉川智慧丸
日銀広島支店長

WHEN



爆心地から380メートルにあった旧日本銀行広島支店

1945年8月6日 8時15分に被爆

WHAT



2日後の8月8日

12の銀行を集めて銀行業務再開し、
経済の復興へ

■被爆直後の強さと決断

吉川智慧丸支店長は、広島への赴任後すぐに地下金庫に防災対策を施すなど、強い危機意識を持っていたとされます。8月6日の原爆投下により自身も被爆により重傷を負いながらも、わずか2日後の8月8日には、倒壊の危険もある中で支払業務を再開する決断を下しました。

■信頼を基盤にした「自己申告」による払い出し

当時、多くの市民は預金通帳や印鑑を喪失していました。吉川支店長は、銀行員たちにこう指示しました。

「（預金者の）言い値で払出しを行いなさい。」

この“自己申告による払い出し”は、後に「日銀の奇跡」と呼ばれました。驚くことに、後に確認された金額と申告額にはほとんど誤差がなかったと言われます。

この出来事は、**人間の誠実さを信じ、互いに信頼する**という深いメッセージを広島の歴史に刻み、1995年の阪神淡路大震災、2011年の東日本大震災の際にもその精神は受け継がれています。

03. 「ダイアログ・イン・ザ・ダーク」の特性

- ◆ 「ダイアログ・イン・ザ・ダーク (DID) 」は、完全な暗闇の中で、視覚に頼らずに**対話・協働する体験型プログラム**です。
- ◆ 視覚障害者が案内役となることで、参加者は普段の立場や価値観を超えて**「新しい感覚で人と向き合う」**ことができます。
- ◆ 暗闇は**「平等性」「本質に気づく場」「境界を越える契機」**を象徴します。
- ◆ 1989年、ドイツではじまり、これまで50か国で開催。現在、20か国で開催中。



創設者/哲学博士 アンドレス・ハイネッケ



ダイアログ・イン・ザ・ダークとは

漆黒の暗闇での体験を通して、人と人とのかかわりや対話の大切さ、五感の豊かさを感じる
「ソーシャルエンターテイメント」

“純度100%の暗闇”の中、暗闇のプロフェッショナルである視覚障害者がアテンド。

<https://did.dialogue.or.jp>

1. 平和の再定義

- 平和とは単に「戦争がない状態」ではなく、「**他者との違いを理解し共に生きる力**」として体感できる。
- DIDでは参加者が暗闇の中で他者を信頼し、協力する中で**「平和の基盤とは何か」**を体験を通じて理解する。

2. 広島の記憶を未来へつなぐ

- 建物の歴史と体験型プログラムでの対話が重なることで、原爆の惨禍を
「記録から記憶へ」「記憶から共感へ」移行する。
- 過去をただ知識として学ぶだけでなく、**平和を能動的に創る姿勢を育てる。**

3. 多様性と共生の象徴

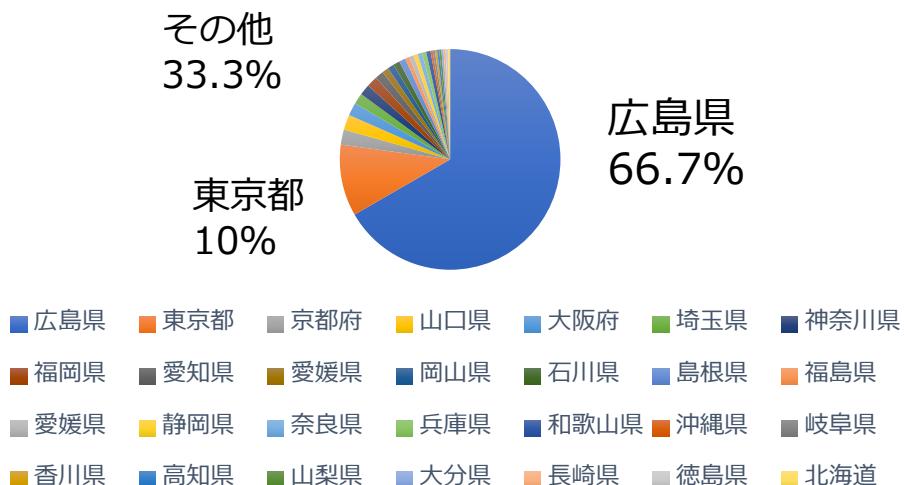
- DIDが掲げる「差別や偏見を超えた共生」と、広島が発信する「核を超えた平和」は響きあい、暗闇という普遍的な場を通じて、**国籍・年齢・立場を超えて対等に話し合うことができる。**

実施期間：2025年8月2日～8月11日（10日間）

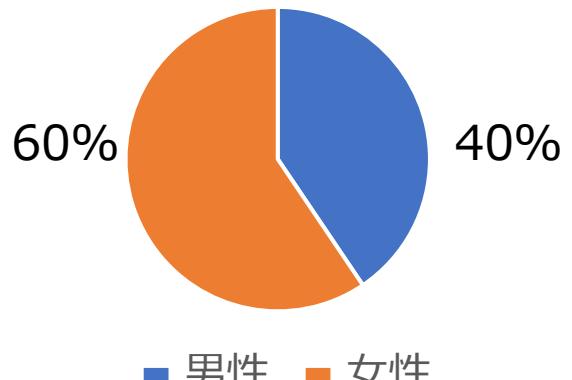
実施会場：旧日本銀行広島支店

体験者数：476名

県別参加者

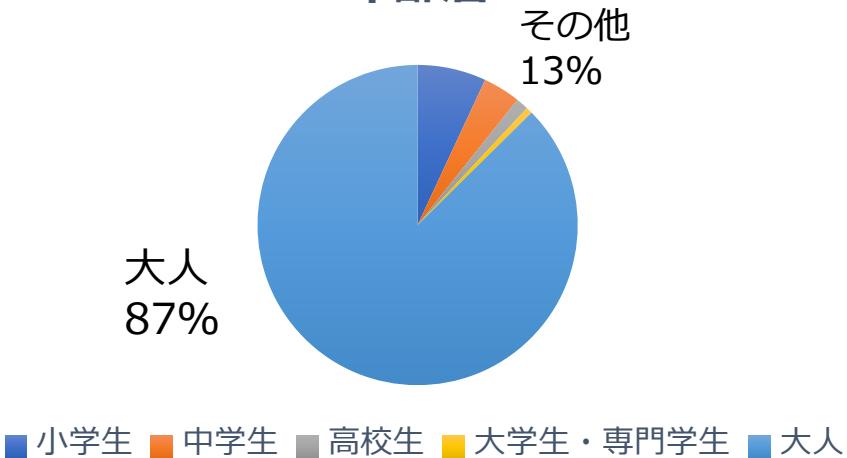


性別



■ 男性 ■ 女性

年齢層



06. 参加者

DIALOG
IN THE DARK
JAPAN

松井広島市長、湯崎広島県知事ほか、広島市民だけではなく首都圏、その他から多くご来場されました。



07. 参加者の感想より

2025年8月7日、広島市の旧日本銀行広島支店で開催された「ピース・イン・ザ・ダーク」に参加した。

アテンドのみきティの案内で暗闇に入ると、最初に足元に広がったのは落ち葉の感触だった。踏みしめるたびにカサカサと音が響き蝉の声がずっと続いている、室内でありますながら夏の濃い空気を感じさせた。その場では、名前を呼び合いながらボールを転がすやりとりがあり、お互いの声や手を叩く音を頼りに、見えない相手の存在を確かめ合った。

その後、私たちは軍医ナカモトさんの家に招かれた。畳に腰を下ろすと、足元の柔らかさやちゃぶ台の木の冷たさが手のひらに伝わってきた。麦茶のグラスはひんやりとしていて、口に含んだとき、暗闇の中に小さな安心感が広がった。冷たい麦茶を囲みながら、1945年の広島に流れていたであろう時間を想像する。当時多くの家庭で、家族がちゃぶ台を囲み、ご飯を食べ、日々の暮らしを営んでいたのだろう。その「当たり前の日常」が原爆によって突然奪われたのだと思うと、戦争は決して過去の出来事でも、遠い国の話でもなく、私たちのすぐそばにある現実のように思えてきた。

一緒にその空間を過ごした人の中には、広島で生まれ育った高校生や大学生もいた。話をする中で、彼らもまた戦争を直接語ってくれる家族を持たない世代であることがわかった。私自身も同じで、親族に戦争体験を聞かせてくれる人はいない。戦後80年という節目に、記憶を直接語れる人が少しずつなくなっていく中で、私たちはおそらく、戦争の記憶に触れられる最後の世代になるのかもしれない。

やがてナカモトさん宅を後にしようとしたとき、それまで響いていた蝉の声が突然止み、直後に「カーン」という鐘の音が鳴り響いた。その瞬間、私たちは1945年から2025年の広島の夏へと戻ってきた。光の小道を進んで暗闇を抜け、再び明るい世界に戻ったとき、安心感と同時に、あの暗闇から離れてしまうことへの寂しさを感じた。

戦争によって奪われたのは命だけではない。当たり前の日常もまた失われてしまった。平和は特別なものではなく、こうした日常の延長にある。けれど、同じ日常の中からでも、分断や差別が積み重なれば、戦争に向かってしまうこともある。平和と戦争は遠く離れた別の世界ではなく、どちらも私たちの毎日のすぐそばにあるのだ。

だからこそ、平和のために対話を重ねていきたい。戦争を他人ごととせず、自分の生活に引き寄せて考えることの大切さを、暗闇の中で確かに受けとめた。（大学生）

07. 参加者の感想より

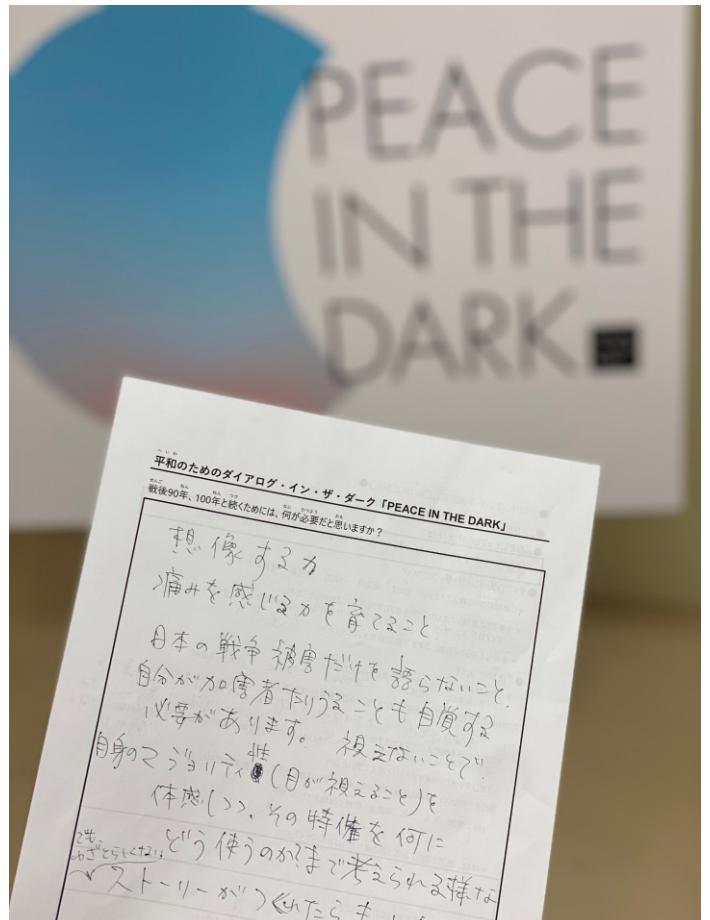
「対話をあきらめない信じ続ける事。」（42歳）

「戦争だけではなく災害が多く多発している中、自分だけ、自分の国だけ、知人だけではなく周りの人と協力し、思いやる、想像する、受け入れる、受けとる力が必要だと思います。ありがとうございます。」（49歳）

「80年前の原爆投下の日に広島にいた祖父の足跡をたどりこの地に来ました。その時に何があったのか、どうしてそのような事が起きたのかを多面的に、また繰り返し知ることが重要だと思います。また、他者に対して、特に自分の属性と異なる他者に対して排他的になれば、争いのモトなので、できるだけ寛容でありたいと考えています。」（57歳）

「社会的、国際的な問題はすべて人が行って、良くも悪くも人のつながりだと思います。現実には、民族、宗教など多くの壁があるが、相手のことを理解する、理解しようとする行動から始まるを感じた。」（61歳）

「国を超える対話 宗教を除く会話・対話 人種を超えた対話 過去、先人たちが生きた時代を知る、学ぶ世代を超えて、今日のように顔を合わせ、話をする場の大切さを改めて感じました。このような企画をありがとうございます。広く一人でも多くの方に参加してもらいたいです。」（72歳）



07. 参加者の感想より

「みんなで話し合って決めることが必要だと思います。すごく当たり前のことだけど、それが今できていないから戦争が起きているから、世界中のみんな（トランプもプーチンも！）がそう思えたら、戦争はなくなるんじゃないかなと思います。」（12歳）

「一人一人の価値観をみとめ合うことが大切だと感じました。みんなの思う「正しさ」はちがうとおもいます。そこで「正しさ」をみとめるのではなく、おしつけると戦争が起こるのだと思っています。」（15歳）

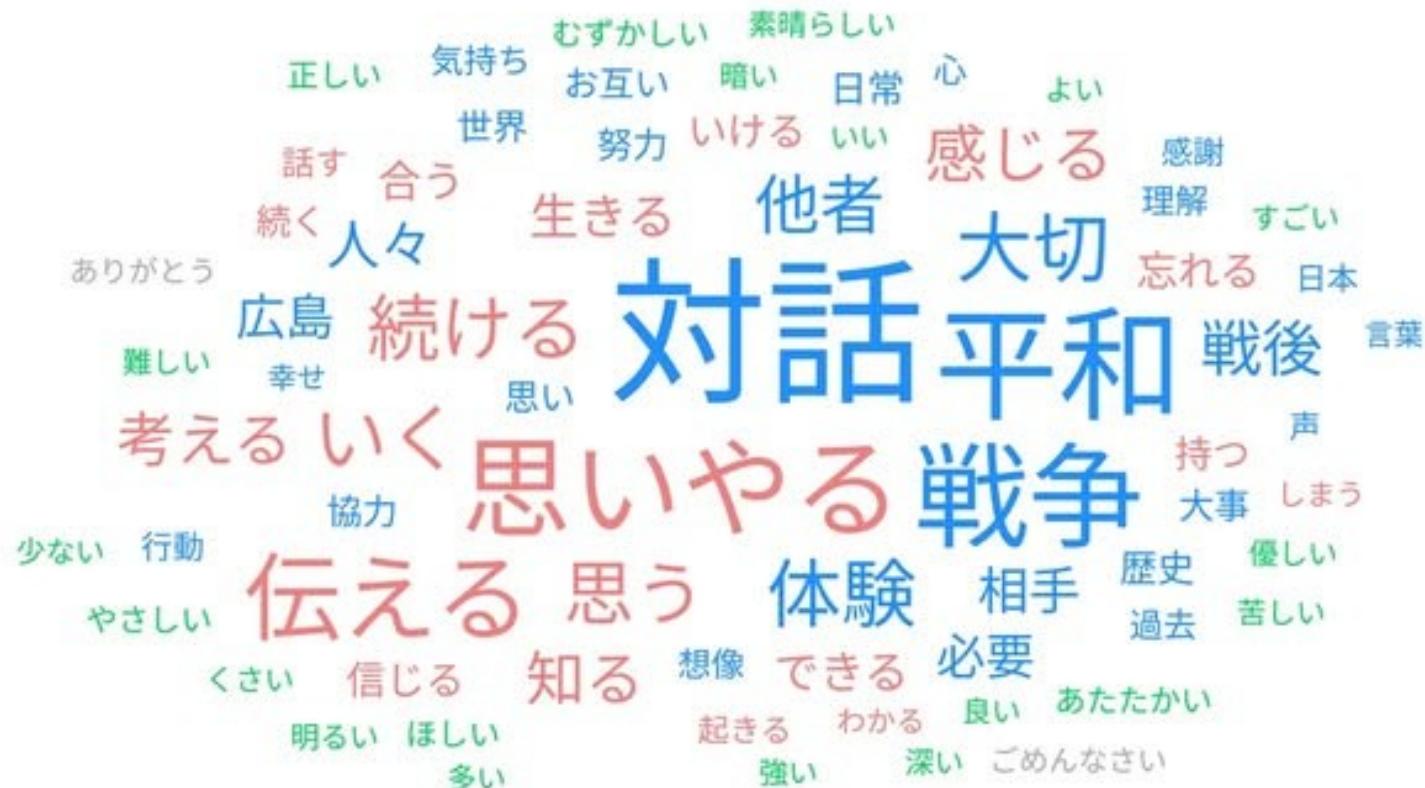
「何故戦争が起こったのか、知ること。特に日本は、加害の歴史も被害の歴史も持っているので、正しく理解することが必要だと思います。」（25歳）

「当たり前を当たり前と思わないこと。今日より明日、よりよくなろうすること。対話すること。忘れないこと。」（32歳）

「全員にできる事は、日々の中で他者を思いやり、分かり合うための対話と努力をすること。例えば、レジの行列の横入があったとして、『なんだあいつ』と思ってその不機嫌をそのまま相手にぶつけることはカンタン。でもそこで一步踏みとどまって『列に気づいていなかったのかも、間違えたのかも』と思って、まずは落ち着いて伝えるところからスタートするなど。国同士の戦争などの大きな紛争だけでなく、個人間の紛争にも気づき、それを防ぐために動く事。戦後、何もなかったところから、今の裕福な暮らしは先人たちの努力のおかげ。私たちが守り、つなげていくもの、という意識をもつ。」（33歳）



すべての参加者の感想のテキストマイニングの結果です。

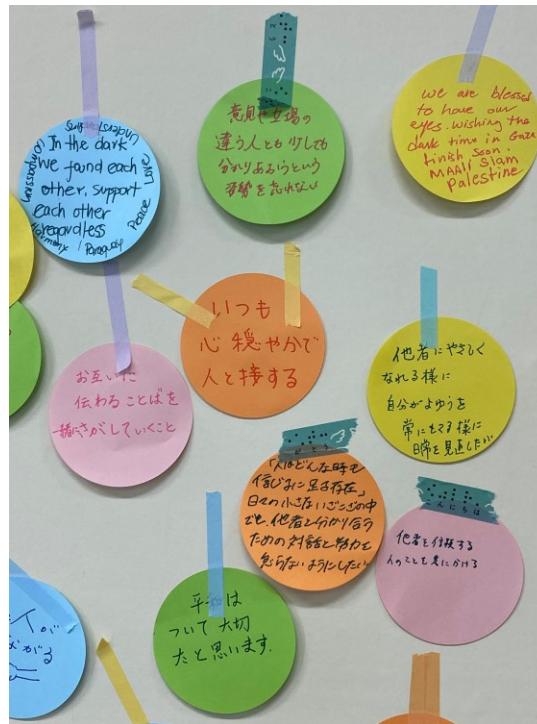


出現頻度のスコアが高い単語を複数選び出し、その値に応じた大きさで図示しています。

単語の色は品詞の種類で異なっており、青色が名詞、赤色が動詞、緑色が形容詞、灰色が感動詞を表しています。

08. 参加者の「平和のために自分ができること」

2025年に生きる私たちが、1945年の広島の日常に行き考察し、再び、2025年に戻り、
これからの平和が90年、100年と続いていくために大切なことを語り合い、自分は何かできるか
を考え、参加者はそれを小さな紙にそれを思い思いに書き残しました。



08. 参加者の「平和のために自分ができること」



08. 参加者の「平和のために自分ができること」



08. 参加者の「平和のために自分ができること」



08. 参加者の「平和のために自分ができること」



08. 参加者の「平和のために自分ができること」



08. 参加者の「平和のために自分ができること」



90年、100年と長く平和を続けるためには、「国家間の取り決め」だけでなく、私たち一人ひとりの日常の行動と心の持ち方が 積み重なっていくことが欠かせません。

以下は、参加者による「平和のためにできること」に基づく考察結果です。

1. 心の在り方を整え、他者を尊重し、違いを受け入れる姿勢を持つ。
2. 対立があっても「話し合い」で解決しようとする習慣を身につける。
3. 小さな親切や思いやりを大切にすることで、身近な平和を育む。
4. 学び続ける。
歴史を学び、戦争や暴力の悲惨さを知る。また、国際情勢や社会問題に関心を持ち、正しい情報を見極める力を養い、多文化理解や異なる価値観を学び、相互理解を深める。
5. 日常生活でできる実践を大切にする。
家庭や職場など、身近な人との関係を大切にし、争いを避ける。公正・平等を意識し、差別や偏見を広げないようにする環境を守り、未来世代のために持続可能な生活を心がける。
6. 社会との関わりを意識する。
選挙や市民活動に参加し、平和や人権を重視する政策を支持する。ボランティアや地域活動に関わり、信頼の輪を広げる。国際交流や異文化体験を通じて「人と人のつながり」を深める。子どもや若い世代に「平和の大切さ」を語り継ぐ。戦争体験者や平和活動家の声を記録・共有する学校や家庭で「対話・共感・協力」の価値を育てる。

1. 歴史の理解と対話の重要性

「何があったのか、どうしてそのような事が起きたのかを多面的に知ることが重要」と述べ、歴史を学び、他者との対話を通じて理解を深めることが平和につながる。

2. 他者への思いやり

「相手と話すことで世界が広がる」とし、異なる価値観を持つ他者を理解し、思いやりの心が平和を築く基盤である。

3. 負の感情の分離

「負の感情を持つ時でも、いかにそれを人と分けて考える重要性」を感じ、感情を適切に扱うことが対話や関係構築において重要である。

4. 平和のための行動

「みんなで話し合って決めることが必要」とし、対話を通じて意見を交換し、共通の理解を築くことが平和を維持するために不可欠である。

5. 未来への希望

「戦争の悲惨さを忘れずに語り継ぎ、対話して平和を考えることの大切さを感じた」とし、次世代に平和の大切さを伝えることが未来の平和につながる。

出現頻度の高いフレーズ30

1. 思いやり
2. 対話 (ダイアローグ)
3. 平和
4. 笑顔
5. 助け合う
6. お互いを認め合う / 尊重
7. 知ること・伝えること・語り継ぐ
8. 人を信じる / 信頼
9. 寄り添う
10. 行動する
11. 愛 / 愛する
12. 感謝
13. 当たり前の日常を大切に
14. 違いを受け入れる
15. 想像する / 想像力

16. 声をかける / 声を出す / 声を聴く
17. 未来へつなぐ / 次世代へ
18. 条件が変わることで 気づく / 視点の転換
19. 人とのつながり
20. 小さなことから始める / 日常の行動
21. 戦争をしない / 核廃絶 / 戦争の愚かさ
22. 違う立場の人とも 分かり合う
23. 優しい心
24. 希望を持つ
25. 命の大切さ
26. 一人一人が大切
27. 支え合う
28. コミュニケーションを続ける
29. 安心できる関係
30. 過去から学ぶ
(広島・長崎・被爆の記憶)

09. オープニングレセプション

DIALOG
IN THE
DARK



2025年8月1日
旧日本銀行広島支店 1Fにて

この度の開催実現に多大なお力をいたいたいた
皆様にお集まりいただきました。

10. 在日大使・大使夫人コーラス



8月5日には、駐日大使・大使夫人のコーラスグループが、爆心地から380メートルの旧日本銀行広島支店の会場にお集まりいただき平和のために歌っていただきました。

ご参加されたのは、
ベネズエラ、メキシコ、ガーナ、パレスチナ、
ベトナム、ラオス、セネガル、パラグアイ、
ニュージーランド、ハイチ、ミクロネシア、
そして日本。

当日は岸田元総理も駆けつけてくださいました。

11. 中本覚二軍医について

暗闇の中で中本覚二軍医の家を訪れましたが、
中本軍医は広島で赴任中に被爆、懸命の救命作業の中で
1945年にお亡くなりになりました。

そのひ孫、玄孫が私たちダイアログで現在働いています。
その関係で大切に保存されていた様々な当時のものをご家族から
提供してもらい、それを皆さんに暗闇の中で触れてもらうことで
よりリアルな体験となりました。

その中の一つに当時ヨーロッパに渡欧されたときに
使われていた皮の鞄をお借りし「日銀の奇跡」の逸話、
人を信じ切ることが80年後も続いている証として
「信頼の募金箱」-カギのかけない募金箱-を会場に設置しました。

こちらの寄附は、ガザで暮らす子どもたちが青空を見上げ、
ミサイルに怯えるのではなく、やがて平和な空の下、自由に走れるよう
に願いを込めながら、現状を生きるための寄付として
特定非営利活動法人（認定NPO）パレスチナ子どものキャンペーン
CCP Japan (<https://ccp-ngo.jp/>) へ**257,623円**を送りました。



中本軍医の孫、
ひ孫、玄孫のみなさま



「信頼の募金箱」

12.「平原綾香 Jupiter基金」のご支援による子ども体験

「平原綾香 Jupiter基金」で子どものダイアログ体験をご支援いただき、
今回のPEACE IN THE DARK（広島・東京）に子どもたちを招待させていただきました。

<https://www.jupiter-foundation.jp/>



13. ボランティアについて

ご協賛企業の中外製薬株式会社・株式会社みずほフィナンシャルグループの社員のみなさまはじめ、ボランティアとして外部の方にも運営に関わっていただきました。朝礼からご参加いただき、お客様対応や参加者アンケートをアテンドに読んで伝えるなどのお仕事をご一緒にできました。こうした関わり方によってお互いの気づきがより醸成されました。



14. 収支報告

■収入	
入場料	0
協賛金	50,000,000
寄附金	700,000
クラウドファンディング	10,082,000
計	60,782,000

■支出	
会場費	0
コンテンツ開発費	4,800,000
設計費	2,800,000
施工費	12,800,000
人件費	7,800,000
事前調整費	2,200,000
アテンド研修費	9,800,000
スタッフ研修費	5,800,000
宿泊費	5,000,000
交通費	3,300,000
運送費	600,000
クラファン運営費	3,300,000
広報関係費	2,000,000
雑費	582,000
計	60,782,000

■収支 0円

15. プロジェクト総括と可能性

総括：

旧日本銀行広島支店での「平和のためのダイアログ・イン・ザ・ダーク」は、

「記録された過去」から「体感される未来」へと平和をつなぐ試みです。

視覚を閉ざしたときに初めて見えてくる「他者への信頼」「共生の可能性」は、

戦後80年の節目にふさわしい、未来への新しい平和教育の形になり得ます。

15. プロジェクト総括と可能性

今後の可能性：

1. 教育・平和学習の刷新

暗闇体験を取り入れることで、従来の座学的な平和学習を「実感を伴う中での対話」の平和学習に拡張できる。

2. グローバルな対話拠点

様々な国から広島平和記念資料館に訪れた人々と共に「平和に向けた対話」のモデルケースになりうる。

3. 次世代への継承

戦争体験者の語りが少なくなる時代、体験型の「平和の感覚教育」は世代を超えて持続可能になりうる。

4. 観光・文化資源との融合

被爆建物でのアートや対話体験は、広島を「記憶の街」から「未来を構想する街」へとアップデートする契機になる。

16. ご協賛・ご協力いただいたみなさま

主催

Dialogue Japan Society
一般社団法人 Dialogue Japan Society

共催



協賛



後援

- ・広島県
- ・広島商工会議所
- ・広島テレビ放送株式会社
- ・株式会社テレビ新広島
- ・株式会社広島ホームテレビ

協力

- ・広島電鉄株式会社
- ・ANAホールディングス株式会社

ご寄附

- ・第一生命保険株式会社
- ・株式会社ロジコムホールディングス
- ・株式会社ヒロテック
- ・中外テクノス株式会社
- ・株式会社アンデルセン
- ・平原綾香 Jupiter基金
- ・株式会社JERA

17. クラウドファンディング

#広島県 #社会にいいこと #子ども・教育

純度100%の暗闇で平和を語る。ダイアログ・イン・ザ・ダーク@広島



一般社団法人ダイアログ・ジャパン・ソサエティ



支援総額

10,082,000円 目標金額 8,000,000円

支援者 369人 募集終了日 2025年6月30日

♡ 56

<https://readyfor.jp/projects/...>

コピー

専用URLを使うと、あなたのシェアによってこのプロジェクトに何人訪れているかを確認できます



Facebook



X



LINE



note

17. クラウドファンディング

クラウドファンディング応援メッセージ56名のみなさま（敬称略・順不順）

17. クラウドファンディング

17. クラウドファンディング

クラウドファンディングでご支援いただいた皆さん

(敬称略・順不同)

Lana/渕上綾子/白澤健志/sasaki family/禿 愛子/寺尾聖一郎/黒田悦子/山口有里/大隅朋生/高野庸子/田中慶子/河本宏子/小布施敦士・香/本田武弘/黒木潤子/浅井明紀子/菅聖子/加藤弘美/吉野由衣子/さわパンダ/猪上賢持/森本行雄/天谷友紀/飯沼益/志村友理/柳沢正和/寺澤裕太/安部みのり/村川祐子/こも/よっぱ/岩田真吾/今野健一郎/窪丈雄/ホソイトシキ/K2U/関川香織/石橋 (荒木) /了平/藤澤春香/タツキー/Minako Suematsu/平館宏美/重松利恵/河原由実/よしかわまいこ/川ちゃん/金子秀太朗/高橋/本畠瑞歩/吉川晶子/幸田フミ/西島孝/大門小百合/小巻亜矢/茂木潤一/出雲充/Akio Okamoto/矢崎映子/柴田励司/タツミン/土肥栄祐/本多達也/一木典子/鈴木聰之/Mutsuo Iwai/堀内勉/yumikuma/rikka/Mayumi Shinmachi/亀井善太郎/小林剛/まついかおり/守屋貴司/長岡香江/敷田博昭/羽塚順子/いわさようすけ/ハツムラキヨ力/志賀アリカ/佐々木真由美/船田幸夫/宍戸遊美/三間瞳/石橋京士/永本剛/Giftリカ/菅原聰/山田メユミ/久野正人/青空応援団/佐藤尚之/山田奈央子/最上沙紀子/田井えみ/寺尾結理奈/久保青子/白河桃子/松本真一/酒井由紀子/合同会社MONSHIN/田邊輝真/花起や/松下由起子/伊藤剛 (asobot inc.) /NPO Megurie 玉置梨絵/漆器「めぐる」漆とロック株式会社/株式会社ルミネ代表取締役社長 表輝幸/一般財団法人C.W.ニコル・アファンの森財団/一般社団法人みんなのグリーフケア 森田藍子/及川美紀party0626/サヘル・ローズ/サイトウマサミツ即興イラスト/岩井睦雄 他

計369名のみなさま

ご寄付をいただいた皆さん (敬称略・順不同)

宮本洋一/河本宏子/宇田吉範/山口有希子/小安美和/岡本純子/浜田敬子/原文子
青木優/小木曾麻里/川原井裕子/三輪正浩/大門小百合/松本理永/高橋ゆき/龍治玲奈/渡辺由美子

18. メディア露出

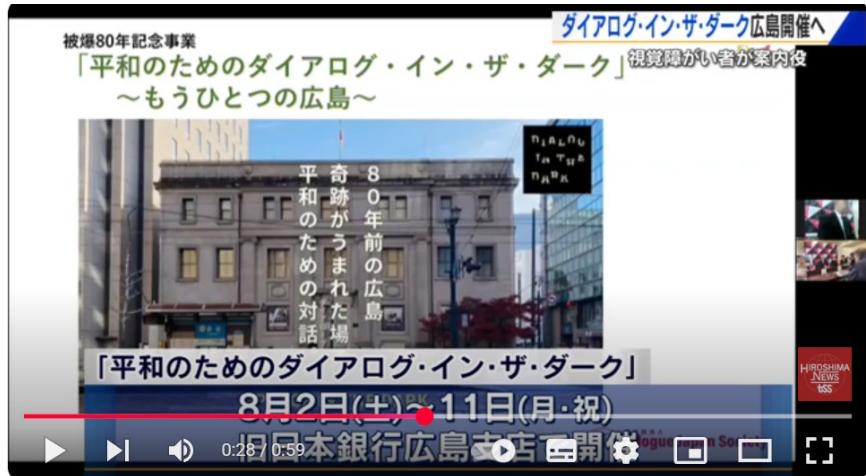
被爆80周年のために多くのイベントが開催された中にも関わらず、
多くのメディアに丁寧に取材をしていただき、番組や記事にしていただきました。
その一部をご紹介します。

18. メディア露出-1

テレビ新広島

2025.06.16.

<https://www.youtube.com/watch?v=169rDvzbXq8>



暗闇で人とのつながり感じる体験プログラム「ダイアログ・イン・ザ・ダーク」 被爆80年の夏 広島で開催 (2025/06/16 18:46)



2025.08.02.

視覚障害の世界を通じて対話 対等な立場で平和のあり方考える 2日
から開催中・広島市

↑ 2025年8月2日 18:05



<https://news.ntv.co.jp/n/htv/category/society/ht7790ad91bc8b4595bbc50a26d168951a>

18. メディア露出-2

Peace in the Dark program offers reflective journey in Hiroshima

ESG/SDGs

EMI MAEDA
CONTRIBUTING WRITER

Marking the 80th anniversary of the atomic bombing, Hiroshima hosted a powerful experiential program called Peace in the Dark where participants could quietly reflect on the meaning of peace.

Held from Aug. 2 to 11 at the former Bank of Japan building in Naka Ward, with an opening ceremony on Aug. 1, the event was co-organized by the City of Hiroshima and the Dialogue Japan Society. All sessions were fully booked before launch. Guided by visually impaired attendees through complete darkness, participants engaged in dialogue — and emerged with their own personal reflections on what peace truly means.

The opening ceremony featured speeches by Hiroshima Mayor Kazumi Matsui, Shimizu Corp. senior advisor Yoichi Miyamoto and others. Shinako Shimaoka, the creator of the Dialogue Japan Society, referenced the "ministry of the Bank of Japan" — where, just two days after the atomic bombing, it let commercial banks use the building and citizens gathered there to make withdrawals, in many cases lacking documentation and relying on trust. Remarkably, the amounts they reported were found to be almost entirely accurate. "Turning this place into darkness and engaging in dialogue about peace carries deep meaning," Shimaoka emphasized. "This may be a small project, but it is by no means powerless."

Matsui, who previously experienced the Dialogue in the Dark program in Tokyo, reflected: "It freed me from my fixed

assumptions. Dialogue without relying on sight deepened my understanding and empathy toward others." He expressed hope that more people would have the opportunity to experience it, calling it a valuable initiative that fosters a culture of peace through dialogue and mutual respect.

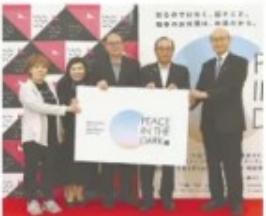
Yoichi Miyamoto, a senior adviser at Shimizu Corp., reflected on the company's involvement in constructing and later restoring the historic venue and noted, "Through dialogue, we cultivate the ability to embrace diversity and stand on equal ground." He stressed the importance of such experiences in fostering mutual understanding and empathy in a world increasingly marked by division.

Kyoko Shimura, representative director of the Dialogue Japan Society, introduced the program as "the world's first Dialogue in the Dark centered on the theme of peace." She noted that "the opposite of war is not simply peace, but the effort to continue a fair dialogue" and expressed her commitment to sustaining peace-building initiatives into the future.

Miki Kawabata, an attendee originally from Hiroshima, recalled what survivors had told her when she was a child: "One told me, 'Peace means forgiving each other.' Another said, 'Peace is passing on stories to children and sharing together.' Their words made me reflect on what peace truly means to me." She expressed her hope that those gathered would also take time to reflect on peace together.

In the program, participants formed small groups and stepped into total darkness. Given white canes, they navigated without vision, relying solely on voices and physical cues. While initial confusion and unease were common, conversation gradually emerged and a quiet sense of connection began to grow. It was precisely through the absence of sight that participants noticed things they might otherwise have overlooked.

Within the darkness, a symbolic journey transported them to the summer of 1945 — the day before the atomic bomb was dropped. Through sound and imagination, they encountered the lives and thoughts of people from that time. This was not a space for seeking the "right answers," but for sharing questions without visual cues. As participants listened closely and turned inward,



The opening ceremony DID

emotions rarely touched in daily life quietly surfaced.

Toward the end of the program, participants returned to 2025 and were given time to reflect and engage in conversation with those they had journeyed into the darkness with. As they listened to each other's words, they were gently invited to contemplate what peace meant to them.

Even without clear answers, carrying that question home lies at the heart of this experience. The words exchanged at the event continue to linger quietly in the mind, subtly transforming the way one sees the world outside.

Many shared reflections such as "Getting to know someone is the first step toward listening them" and "If we learn to acknowledge and support one another, a peaceful future will surely follow" One participant said: "Because I couldn't see, I was able to focus entirely on the other person's heart. It's been a long time since I've connected with someone so deeply."

Some were encouraged by a simple word from another, while others found comfort in shared moments of silence. The question of what peace means to them, gently kindled in the dark, became a small light within each participant — illuminating the first steps toward a more peaceful future, each in their own way.

The Sustainable Japan section highlights issues related to the environment and a sustainable society. For more information, see <https://sustainable.japantimes.com>



Miki Kawabata, a visually impaired staff member from Hiroshima DID



Peace in the Dark program offers reflective journey in Hiroshima - Sustainable Japan by The Japan Times

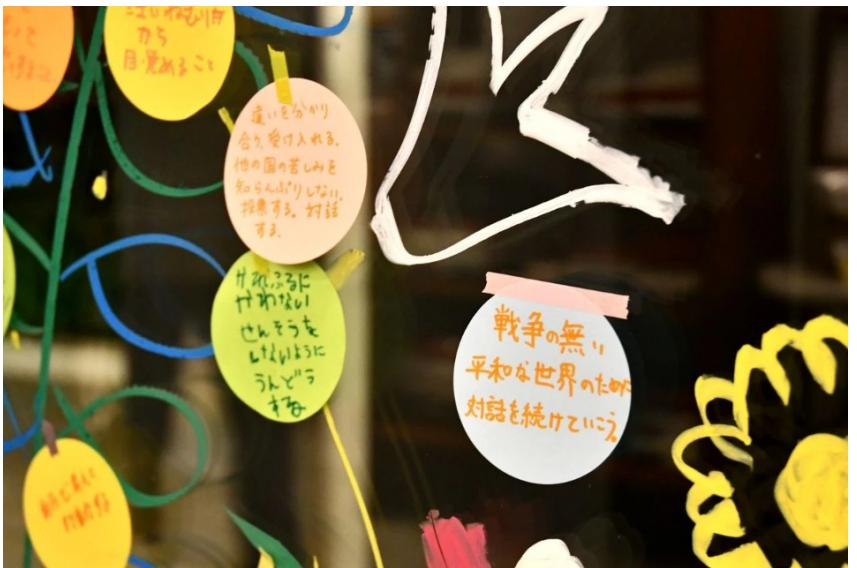
<https://sustainable.japantimes.com/esg/271>

18. メディア露出-3



朝日新聞 SDG s 2025.07.19.

暗闇を旅する90分 信じることの先にある平和
ピース・イン・ザ・ダークは問いかける



<https://www.asahi.com/sdgs/article/15915178>

朝日新聞 2025.07.30.



<https://www.fnn.jp/articles/-/911684>

読売新聞 2025.07.30.

谷川俊太郎さんの詩「闇は光の母」は次の二節で始まる。

〈闇がなければ光はなかった　闇は光の母／光がなければ 眼め はなかった
眼は光の子ども／眼に見えるものが隠している　眼に見えぬもの〉
闇は人に敬遠されがちだが、その中にこそ、大切なものがあると表現した。

詩を実感できるようなイベント「平和のためのダイアログ・イン・ザ・ダーク（暗闇の中の対話）」が今夏、被爆80年となる広島で開かれる。真っ暗な部屋で8人ごとにチームを組み、平和をテーマに意見を交わす。

視覚情報が途絶される中、立場を超えて対話し、行動を共にすることで新たな気づきが生まれるという。

主催する一般社団法人「ダイアローグ・ジャパン・ソサエティ」によると、「暗闇の中の対話」は1988年にドイツで始まった。教育や福祉の現場で広がり、約50か国900万人以上が体験してきた。

今回の会場は旧日本銀行広島支店（広島市中区）。被爆2日後に営業が再開され、通帳や印鑑を失った市民の申告を信じて預金の払い戻しが行われた。同法人の志村真介理事は「戦争の反対語は単に平和ではなく、対等な対話を続けること。歴史的な場で考えを深めてほしい」と話す。

期間は8月2日～11日。復興を遂げた被爆地の「闇」から生まれる平和があるはずだ。

<https://www.yomiuri.co.jp/local/kansai/news/20250730-OYO1T50048>

（広島総局長 神谷次郎）

18. メディア露出-6

毎日新聞 2025.08.18.

戦後80年 暗闇で触れて知る“広島” 被爆前の街並み追体験 白杖手に 広島



白杖をもち、前の人々の肩に手を置いて暗闇へと
入っていく参加者=広島市中区で、日高沙妃撮影

<https://mainichi.jp/articles/20250818/ddl/k34/040/181000c>

婦人画報デジタル



黙るのではなく、
話すこと。
戦争の反対話は、
対話だから。

一般社団法人ダイアログ・ジャパン・ソサエティ

「平和のためのダイアログ・イン・ザ・ダーク～PEACE IN THE DARK (ピース・イン・ザ・ダーク)」

一般社団法人ダイアログ・ジャパン・ソサエティが主催するこの企画では、光を遮断した純度100%の暗闇空間の中、参加者は視覚障害者の案内のとも、再現された民家を訪れ、1945年8月6日以前の“ある一日”を追体験します。当時使われていた品々に触れながら約90分間、参加者は視覚以外の感触や匂いを頼りに戦時下の暮らしを体感し、平和について対話します。

【概要】

会期／2025年7月5日（土）～2025年8月31日（日）
会場／ダイアログ・ダイバーシティミュージアム「対話の森」（東京・竹芝）
料金／大人4,950円、学生2,750円、小学生550円（税込）
予約／オンライン事前予約制。

18. メディア露出-7

朝日新聞 2025.08.29.

白杖を手に暗黒の空間へ 「暗闇の中の対話」でつかんだ平和のヒント

朝日新聞 > 白杖を手に暗黒の空間へ 「暗闇の中の対話」でつかんだ平… > 写真・図版



「平和のためのダイアログ・イン・ザ・ダーク」で、暗闇での体験後に話し合う参加者ら=2025年8月6日午後3時

<https://www.asahi.com/sp/articles/AST8X3S5MT8XPITB005M.html>

18. メディア露出-8

Hiroshima to host experiential show Peace in the Dark

ESG/SDGs

EMI MARUDA
CONTRIBUTING WRITER

An experimental program titled Peace in the Dark will take place in Hiroshima this summer, marking 80 years since the atomic bombing. Designed as a space for atomic reflection and dialogue on peace, it invites participants to converse in complete darkness. It draws on the philosophy of Dialogue in the Dark (DID), an initiative that encourages deeper human connection by removing visual cues.

This unique program is organized by the Dialogue Japan Society (DJS), a general incorporation association that has brought DID to Japan since 1994. Originally launched in Germany in 1997, DID has now been experiencing more than 20 years of growth in over 50 countries. In Japan alone, where the program has been running since 1999, over 300,000 participants have taken this groundbreaking initiative, which fosters empathy and inclusion.

Co-hosted with the city, it is part of Hiroshima's official commemorative projects for the 80th anniversary of the bombing. The program will run from Aug. 2 to 11 at the former Hiroshima branch of the Bank of Japan, a building that miraculously withstood the atomic blast just 380 meters from the

hypocenter.

DJS founder Shinsuke Shirama explained the core structure of the program: "In DID, a group of visually impaired participants enter a space of total darkness. In our daily lives we rely heavily on sight, but in such an environment we quickly realize how helpless we become without it. In this setting, we become people with visual impairments."

In the dark, roles are reversed. "Typically, people without disabilities assist those who are visually impaired," Shirama said. "But in the dark, it's the other way around — visually impaired guides support sighted participants. By letting go of vision, both sides can meet on truly equal grounds. That's the core concept behind the program." In this space, mutual assistance arises naturally, and participants sharpen their nonvisual senses. It is within this environment that human-to-human dialogue begins to emerge.

The core theme of the program is to meet and engage in dialogue with diverse individuals in equal footing. In our modern society, we rarely have meaningful encounters with those who differ from us. DID aims to bridge these unconscious divides and foster shared creation beyond differences.

Participants often experience notable shifts in awareness. "Many say that after the program, they notice people with visual impairments or others in need more



Dialogue in the Dark participants prepare to experience the dark together with the help of white canes and a professional attendant for the visually impaired.

readily and feel confident reaching out to help," Shirama said. The program cultivates a readiness to see and engage with previously overlooked aspects of society.

Facing others without relying on vision also leads to confronting our own biases. Those with visual impairments, for example, often have limited career options, or wheelchair users face mobility restrictions like limited seating on bullet trains. Shirama said, "Without meeting them, we remain unaware of such realities." These insights are also highly valued in school and corporate training programs, and DID has been widely adopted in both settings.

The guides in the dark, all visually impaired, are trained by DJS as professional attendants. Their role goes beyond employ-

ment; they participate in society on equal terms, offering a new perspective on inclusive employment models.

The program was conceived by the German philosopher Andreas Hennicke. With a Jewish mother and relatives who were victims of the holocaust, he developed a strong awareness of the importance of dialogue across differences. After studying philosophy, he worked at a radio station, where he was assigned to help a 24-year-old journalist returning to work after losing his sight. Initially positioned as the helper, Hennicke soon realized he was the one learning. He came to a conclusion: To overcome prejudice and break down the walls between different cultures and perspectives, we need opportunities to meet. Through encounters and

dialogue, people become aware of new realities and begin to see the world from entirely different points of view. That belief became the foundation of DID.

Throughout, DID shifts into a new phase with Dialogue in the Dark, a program that turns its attention to the question of peace. The experience encourages quiet reflection on the memory of war and the meaning of peace. The program is also being held in Tokyo at the Dialogue Diversity Museum (Tatsu no Mori), located in Hamamatsucho in Minato Ward, from July 5 to Aug. 31.

With sight removed, participants are invited to trace the lives of people during the war using only their imagination. The experience takes the form of a symbolic journey back to 1945 — before the atomic bombing — prompting reflection on the fragility of everyday life and the importance of peace.

The venue chosen for the Hiroshima edition is the former Hiroshima Branch of the Bank of Japan — also played a key role in the city's postwar recovery. Its underground vault, which survived the atomic bombing, had stored all of western Japan's cash reserves at the time. Seeing the approach of war, the branch manager, Clemens Yoshikawa, took through fire prevention measures, including covering the rooftop with soil and removing surrounding wooden structures to create a firebreak.

Two days after the bombing, Yoshikawa gathered 12 others to reopen operations in the building, even without powerbooks or IDs, citizens received the change by verbal cues. A symbol of hope, the vault's memory level of complete trust. Very few cases of false claims were reported. This story of mutual trust remains a powerful symbol of recovery.

Keiko Shirama, the representative of DJS, emphasized the deeper message. "We want children to run not out of fear, but in joy. Even more somewhere in the world, children are fearing under the sky. What does peace really mean? We want them to think about it seriously and discover what they can do." Masahiro Taniguchi, a guide for DID,

shared a formative childhood experience that inspired him to become a guide. "I've never experienced war firsthand," he said, "but I did go there and something that happened to me is very powerful, like a dream instant." He was 4 years old when the Great Hanshin Earthquake struck his hometown of Kobe early in the morning of Jan. 17, 1995. The quake caused a citywide blackout, and the rest of his family found themselves unable to move around in the complete darkness.

But Taniguchi, who had memorized the layout of their home, instinctively took the lead — guiding his parents and sister out, with them holding on to him like tree trunks. "In a crisis, even a 4-year-old tries to do something," he recalled. "But what's truly important is how we prepare before such situations arise through ongoing dialogue in our everyday lives."

Reflecting on the wars happening around the world today, he continued, "There might have been ways to prevent even the wars we see now. Through Peace in the Dark, I hope it gives as many people as possible a chance to think about what they can do personally to contribute to peace."

Shinsuke Shirama addressed the question of why this program is being held now. "Some might say it could wait until the 90th anniversary," he said. "But those who were first graders at the time are now 86 years old. By the time we reach the 90th year, there will likely be far fewer people who experienced the firsthand. That's precisely why we feel this is the right moment — to hold it now, this summer, in both locations."

"The acronym of war is not simply peace, but the effort to continue a fair dialogue," Hennicke once said. In an age rife with division and conflict, his message resonates more than ever. Children looking up not at fighter jets but at clear blue skies, with smiles on their faces — this is the wish for which Peace in the Dark is being held.



Participants exit the venue after an experience in the dark.



Hiroshima to host experiential show
Peace in the Dark - Sustainable Japan

<https://sustainable.japantimes.com/esg/268>

18. メディア露出-9

2025.04.18.

中国新聞

暗闇の世界歩いて感じて 市被爆80年事業 視覚障害者が案内

2025.04.18.

WEB

広島テレビニュース

被爆80周年記念事業 暗闇を通して平和を考えるイベント 広島市

(広島テレビ ニュース) - Yahoo!ニュース

<https://news.yahoo.co.jp/articles/d3b023f51b250e6fffaa321054220c9e19c5aece>

2025.04.18.

朝日新聞

暗闇の中で信じる 被爆80年の広島でダイアログ・イン・ザ・ダーク

<https://www.asahi.com/articles/AST4K470HT4KPITB006M.html>

2025.05.05.

WEB

LITALICO発達ナビ

暗闇で1945年の広島を追体験。「平和のためのダイアログ・イン・ザ・ダーク」

夏休みに開催！クラウドファンディングも

https://woman.excite.co.jp/article/child/rid_Hnavi_35030577/

2025.06.01.

毎日新聞（点字毎日）

暗闇で考える平和 ダイアログ・イン・ザ・ダーク 広島で

<https://mainichi.jp/articles/20250529/ddw/090/040/011000c>

2025.06.16.

テレビ新広島

暗闇で人とのつながり感じる体験プログラム「ダイアログ・イン・ザ・ダーク」

被爆80年の夏 広島で開催

<https://youtu.be/169rDvzbXq8?feature=shared>

2025.07.04.

WEB

MASHING UP

戦争の反対語は「対話」。被爆80年の広島市と共に開催するダイアログ・イン・ザ・ダーク開催へ <https://www.asahi.com/sdgs/article/15915178>

<https://www.businessinsider.jp/article/2507-dialog-in-the-dark-hiroshima>

2025.07.04.

WEB

TOKYO HEADLINE

「平和のためのダイアログ・イン・ザ・ダーク」が7月5日から開催。

戦後80年の今、戦争と平和は「語り継ぐ」ものから「語り合う」ものに

<https://www.tokyoheadline.com/811888>

2025.07.07.

WEB

教育新聞

【戦後80年×教育】広島を思い、暗闇を歩く「対話と協調」のイベント

<https://www.kyobun.co.jp/article/2025070705>

2025.07.15.

WEB

IDEAS FOR GOOD

【7-8月 東京・広島開催】「1945年8月6日」以前の“平和な一日”に触れる。

暗闇の対話プログラム・PEACE IN THE DARK

<https://ideasforgood.jp/2025/07/15/peace-in-the-dark/>

2025.07.16.

WEB

共同通信 JAPAN WiRE

FEATURE: "Darkness" tour draws on Hiroshima calamity to promote peace dialogue

<https://english.kyodonews.net/articles/-/57193>

2025.07.16.

WEB

JAPAN WiRE by Kyodo News

FEATURE: "Darkness" tour draws on Hiroshima calamity to promote peace dialogue

<https://english.kyodonews.net/articles/-/57193>

2025.07.19.

WEB

朝日新聞 SDGsACTION！

暗闇を旅する90分 信じることの先にある平和 ピース・イン・ザ・ダークは問い合わせる

18. メディア露出-10

2025.07.22.

WEB

Japan Times Sustainable Japan

Hiroshima to host experiential show Peace in the Dark

<https://sustainable.japantimes.com/esg/268>

2025.07.28.

日経新聞

〈News〉 視覚障害者による平和体験プログラム開催

<https://www.nikkei.com/article/DGKKZO90286630X20C25A7TYA000/>

2025.07.30.

朝日新聞

戦争の反対語は「対話」 戦後80年 暗闇体験や長崎で平和語る試み

<https://www.asahi.com/articles/AST7Y1FW8T7YTNLL002M.html>

2025.07.30.

読売新聞

闇から平和へ…被爆80年の広島で新たな気づき

<https://www.yomiuri.co.jp/local/kansai/news/20250730-OYO1T50048/>

2025.08.01.

WEB

こここ

「戦争」の反対語は「対話」。

平和をテーマにした暗闇の対話プログラム「ピース・イン・ザ・ダーク」が

東京と広島で開催

<https://co-coco.jp/news/peaceinthedark/>

2025.08.02.

朝日新聞

暗闇で「対話」、平和のために きょうから広島／広島県

2025.08.02.

読売新聞

暗闇で被爆前の広島体験 中区でイベント開幕式典=広島

2025.08.02.

広島テレビ

視覚障害の世界を通じて対話 対等な立場で平和のあり方考える 2日から開催中・広島市

<https://news.ntv.co.jp/n/htv/category/society/ht7790ad91bc8b4595bbc50a26d168951aa>

2025.08.03.

中國新聞

〔被爆80年〕暗闇で対話 平和を考えた 被爆前の街を再現 中区でイベント開幕

<https://www.hiroshimapacecmedia.jp/?lang=ja>

2025.08.03.

中國新聞

暗闇で被爆前の広島体験 中区でイベント開幕式典

2025.08.04.

WEB

FNNプライムオンライン

「奇跡」の舞台・被爆した旧日銀広島支店の暗闇で平和を考える

「核武装は安上がり」をなぜ広島県民は支持したの

<https://www.fnn.jp/articles/-/911684>

2025.08.05.

WEB

婦人画報デジタル

終戦・被爆80年】平和のバトンをつなぐために、わたしたちに何ができる？

婦人画報デジタル（ハーストデジタル）

2025.08.18.

Japan Times Sustainable Japan

<https://sustainable.japantimes.com/esg/271>

2025.08.18

毎日新聞

暗闇で触れて知る“広島” 被爆前の街並み追体験 白杖手に

<https://mainichi.jp/articles/20250818/ddl/k34/040/181000c>

終わりのはじまりのはじまり

2025年、猛暑の夏に旧日本銀行広島支店にて被爆80周年記念事業として開催された
この「平和のためのダイアログ・イン・ザ・ダーク/PEACE IN THE DARK」を

元日本銀行広島支店 吉川智慧丸支店長と
ダイアログ・イン・ザ・ダークをこの世に生み出したアンドレアス・ハイネッケ氏に捧げます。

今後も90年、100年と平和が続くことを願い、対等な対話の場を創出し続けます。

いつの日にか広島で常設できることを望んでいます。
引き続き、ご指導、ご支援いただけますよう何卒よろしくお願ひいたします。



ダイアログ・イン・ザ・ダーク
志村真介
志村季世恵
スタッフ一同

2025年 夏